

いの流水俳壇

間 浩太選

「当季雑詠」

紙漉きの寒九の水を拝みおり 竹崎たかひろ

(評)紙漉きには水の良否が大きく影響するとのこと。

最近では機械漉きが多くなり、手漉きが減少のため、あまり言われないが水温が低い方が良質の紙が漉けると、言われている。

寒の入りから寒の明けの前日まで、すなわち小寒(一月五日か六日ごろ)大寒(一月二十一日ごろ)。小寒と大寒を合わせたのが寒であり、寒に入って四日目を寒四郎、九日目を「寒九」と言っている。

この句の寒九の水とは、殊に寒い日の冷たい水で、紙漉きには良い水のことである。

紙を漉く初めに、寒九の水に対して敬虔な気持ちで紙を漉き始めた句であり、この句の作者の紙漉き、水に対しての敬虔な気持ち表れた句である。

ハンカチを頭に小走り初時雨

友草 水月

(評)冬にさつと降って、さつとあがりあるいは断続して降る雨のことを時雨という。

冬の初めごろから中ごろにかけて多く降る。山から山へあたかも夕立のように移動しながら降ったりする。

その冬の初めての時雨を初時雨と言う。

傘などの雨具を持たず外出中に時雨にあい、この句のようにハンカチあるいは鞆などを頭に小走りするのを見ることがある。

この句の作者も、これを見て冬の冷たい時雨を詠んだものと思われ、時雨がきたか、冬になったなあとつぶやいた様子が目に浮かんできます。

木枯らしが落葉をつれて追って来る

日浦 清光

(評)十月、十一月ごろ吹く強い北西寄りの季節風を「木枯し(凧)」と言ふ。

木を吹き枯らすということから木枯しと言われる。

強い風で、激しい音を立て吹きまくり、荒涼とした冬の訪れを思わせる。

木枯しと言えば、誓子の「海に出て木枯帰るところなし」の有名な句が、頭に浮かんできます。

日浦清光さんの、初めて一句だけ流水俳壇に投句されてきた句です。どのよう

な方が存じませんが、続けて毎月投句していただきたいものです。木枯らしが落葉をつれて追って来るといのは、風とともに落葉が飛んで来る状況を言ったもので、落葉をつれて風が追って来ると言ったのは、俳句的で面白い句だと感じました。

ただ木枯しと落葉は、ともに季語でするので、どちらかを季語でない言葉にと思

ましたが、よい言葉が思いつきませんでした。歳時記でも、木枯しと落葉を一緒に使った句もありましたが、季語の重なった場合は一考したいものです。

古里の番外末寺除夜の行 大川 節弥

鶯舞う二羽が三羽に年用意 片岡 包女

まといつく寒さは独り暮らしかな 小野川町子

菊花展スカイツリーの色やさし 田蔦恵美子

極月の鍵手の中にたしかめる 岡本とも子

しぐるるや浦に龍馬の隠れ部屋 井上 郁子

ぐい呑みの底をまさぐる夕時雨 岡村 嘉夫

寄鍋で話しに咲いた青春会 森岡 義行

そこここに咳の聞こゆる待合所 竹崎 光子

すさま風湯気も譲らずおでんなべ 筒井 一平

色重ね色を紡ぎて山粧う 津田 久美

煮崩れてとろとろ香る蕪汁 川村 博子

通夜に行くひとり一人に冬の月 間 浩太

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597

☎ 893-2012

有料広告

医療法人 森木病院

光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL(088)893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析